

整数表現に関するゼータ関数について

(Bushnell-Reiner の仕事の紹介)

北大理 竹ヶ原 裕元

(Yugen-Takegahara)

Solomon のゼータ関数についての Bushnell-Reiner による数多くの仕事のうち、ここでは Solomon の予想に関するものと、有限群 G が与えられたときの $\mathbb{Z}G$ のゼータ関数の計算についての仕事を紹介します。また、Solomon のゼータ関数の諸性質を見てゆきます。

Λ : a \mathbb{Z} -order in a f.d. semisimpl \mathbb{Q} -algebra A

L : a full Λ -lattice in a f.g. left A -module V

定義 (Solomon のゼータ関数) s を複素変数、

$\zeta_L(s) := \sum_N (L:N)^{-s}$, N は L に含まれる full Λ -lattice 全体を動く。

この関数は $\operatorname{Re}(s) > \dim_{\mathbb{Q}} V$ で確かに収束し、意味を持ちます。特に $V = A = \mathbb{Q}$, $L = \Lambda = \mathbb{Z}$ とすると、Riemann のゼータ関数、 F を \mathbb{Q} の有限次拡大体、 R をその整数環として、 $V = A = F$, $L = \Lambda = R$ とするととき、

Dedekind のゼータ関数にそれぞれ一致します。また、

$A = \mathbb{Q}$, $\Lambda = \mathbb{Z}$, $V = \mathbb{Q}^n$, $L = \mathbb{Z}^n$, とする。

$$\zeta_L(s) = \zeta_{\mathbb{Z}}(s) \cdot \zeta_{\mathbb{Z}}(s-1) \cdots \zeta_{\mathbb{Z}}(s-n+1)$$

$\zeta_{\mathbb{Z}}(s)$ は Riemann のゼータ関数

となっていきます。

Local case でもゼータ関数が定義されますが、

特に、simple \mathbb{Q}_p -algebra の maximal \mathbb{Z}_p -order で定義されたゼータ関数について “Hey's formula” が知られています。

“Hey's formula”

$B := M_n(\mathbb{D})$, D は f. d. division \mathbb{Q}_p -algebra

T : maximal \mathbb{Z}_p -order in B

W : k -copies of simple left B -module

M : a full T -lattice in W

$e := \sqrt{\dim_F D}$, F は D の中心, その整数環を R

$$\Rightarrow \zeta_M(s) = \prod_{i=0}^{k-1} \zeta_R(nes - ei), \zeta_R(s) \text{ は Dedekind の}$$

ゼータ関数

一般の場合も、maximal order 上の lattice の
ゼータ関数は扱い易く (maximal order は algebra
の Wedderburn 分解に関して, simple algebra の

maximal order の直和として表せられた。lattice を
これに従い直和として表せられ、ゼータ関数はこの
直和因子のゼータ関数の積になつていて、次に述べ
る “Euler product”とともに、ゼータ関数の性質を
調べる上で重用を働きをします。

P の添字で P -進完備化、 (P) の添字で局所化をあら
わすと、 Λ_P は \mathbb{Q}_P -algebra A_P の \mathbb{Z}_P -order, L_P は left A_P -
module V_P の full Λ_P -lattice となり $S_{V_P}(s)$ が定義され、
同様に、 $S_{V_{(P)}}(s)$ も定義されます。このとき

$$S_{V_P}(s) = S_{V_{(P)}}(s)$$

が示されて、さらには

$$\text{“Euler product” } S_{V}(s) = \prod_P S_{V_P}(s) \text{ が成り立ちます。}$$

Riemann のゼータ関数、あるいは、Dedekind の
ゼータ関数の Euler product は知られていますが、
これはこの拡張となっています。

Γ を Λ を含む maximal order, $B := \{P: \text{素数} | T_P \neq \Lambda_P\}$
($|B| < \infty$) とおくと、 “Euler product” は

$$S_L(s) = \prod_{P \in B} S_{L_P}(s) / S_{T_P L_P}(s) \cdot S_{FL}(s)$$

が得られます。 $(T_P L_P, T \cdot L$ は Γ -lattice と考える。)

§1 Solomon の予想

A, Λ, V, L は先の定義に従うものとします。いま、

$$A = \prod_{i=1}^r A_i, A_i \text{ は Wedderburn component.}$$

$$A_i = M_{n_i}(D_i), D_i \text{ は division } \mathbb{Q}\text{-algebra}$$

$$V_i = A_i V, k_i \text{ - copies of simple left } A\text{-module}$$

$$e = \sqrt{\dim_{F_i} D_i}, F_i \text{ は } D_i \text{ の中心, その整数環を } R_i.$$

として、次の関数を定義します。

$$\zeta_V(s) := \prod_{i=1}^r \prod_{j=0}^{k_i e-1} \zeta_{R_i}(ne; s-j), s \text{ は複素変数}$$

この関数は Dedekind のゼータ関数により定義されていますから、この Euler product により、“p-part”が考えられ、それを $\zeta_{V,p}(s)$ と表すと、

$$\zeta_V(s) = \prod_p \zeta_{V,p}(s)$$

と、“Euler product”が考えられます。さらに、

定理 (Solomon [1])

素数から成る有限集合 B があり、

$$\zeta_L(s) = \prod_{p \in B} \zeta_{L,p}(s) / \zeta_{V,p}(s) \cdot \zeta_V(s), \text{ 特に.}$$

$\zeta_{L,p}(s) / \zeta_{V,p}(s)$ は \mathbb{Q} 上 \mathbb{P}^1 の有理関数である。

“Solomon の予想”

$$\zeta_{L,p}(s) / \zeta_{V,p}(s) \in \mathbb{Z}[P^{-s}]$$

この予想は、 Λ が maximal order ならば，“Hey's formula”あり、 $\Lambda = \mathbb{Z}G$, G は素数位数の巡回群ならば計算により、それこれが正しいことが知られていました。その後、Bushnell-Reiner[1] は、より“強”形で、肯定的に、この予想を証明しました。

Λ : a \mathbb{Z}_p -order in a f. d. semisimple \mathbb{Q}_p -algebra A

L : a full Λ -lattice in a f. g. left A -module V .

定理 (Bushnell-Reiner[1])

Γ を Λ を含む maximal \mathbb{Z}_p -order とするとき、

$$\zeta_L(s) / \zeta_{\Gamma L}(s) \in \mathbb{Z}[\mathbb{P}^\infty]$$

先に述べた通り、この定理より、たとちに、Solomon の予想が解かれます。以下 Bushnell-Reiner による、この定理の証明を、簡単に説明します。

[証明の概略]

$X = \{M_1, \dots, M_n\}$ を V の中の full Λ -lattice の同型類の代表全体の集合とします。 $(|X| < \infty)$ $M \in X$ に対して、次の閾数を定義します。 s を複素変数として、

$$\zeta_L(M; s) := \sum (L:N)^{-s}, N \text{ は } M \text{ と同型な } L \text{ に含まれる full lattice を動く}.$$

明らかに, $\zeta_L(s) = \prod_{i=1}^r Z_L(M_i; s)$ を得ます。記号。

$$B := \text{End}_A V, B^\times := \text{Aut}_A V$$

$$\{M:L\} := \{x \in B \mid Mx \leq L\} \quad \dots \quad \mathbb{Z}_p\text{-lattice in } B$$

$$\text{Aut}_A M := \{x \in B \mid Mx = M\} \quad \dots \quad \begin{matrix} \text{unit group of } \mathbb{Z}_p\text{-} \\ \text{order in } B \end{matrix}$$

を用いて, $Z_L(M; s)$ を

$$Z_L(M; s) = \sum (L: Mx)^s, \quad x \in \text{Aut}_A M \setminus \{M: L\} \cap B^\times$$

の代表全体を動く。

と変形し. さらには V の中の任意の full \mathbb{Z}_p -lattice X, Y に対して, 新しい index $(X: Y) = (X: X \wedge Y) / (Y: X \wedge Y)$ を導入し, $x \in B^\times$ の norm を, $\|x\| = (Mx: M)$ (M は任意の full \mathbb{Z}_p -lattice L でよい。) と定義すると,

$$(L: Mx) = (L: M) \cdot (M: Mx) = (L: M) \cdot \|x\|^{-1} \quad (\text{さう}),$$

$$Z_L(M; s) = (L: M)^{-s} \sum \|x\|^s, \quad x \in \text{Aut}_A M \setminus \{M: L\} \cap B^\times$$

と表わされます。

いま, B は \mathbb{Q}_p -space としての位相 (\mathbb{Z}_p -lattice は 0 の compact open neighborhood) を導入すると, B^\times はその subset top. で, locally compact な位相群と考えられる。そこで B^\times の Haar 濃度, $d\chi$ (その measure を μ^χ , $\mu^\chi(\text{Aut}_A M)$ は 0 でない有限の値をもつ。) を用い

で, $Z_L(M; s)$ は,

$$Z_L(M; s) = \mu^*(\text{Aut}_\Lambda M)(L:M)^{-s} \int_{B^*} \Phi_{(M:L)}(x) \|x\|^s dx$$

と考えられます。ここで $\Phi_{(M:L)}$ は B の中の $(M:L)$ の char. function。

補題 (Bushnell-Reiner[1])

重を B 上の Schwartz-Bruhat function (ie locally constant & compact support をもつ複素数値関数) とすると,

$$\{\beta_{\Gamma L}(s)\}^{-1} \int_{B^*} \Phi(x) \|x\|^s dx \in \mathbb{C}[P^S, P^{-S}]$$

証明は、まず B が simple algebra, 重が $\text{End}_F(\Gamma L)$ の部分集合 $x + P^f \text{End}_F(\Gamma L)$, $f \geq 0$, の場合に帰着させ最終的には, "Hermite normal form" 的な行列の操作で証明を与えています。

さて、補題より, $\{\beta_{\Gamma L}(s)\}^{-1} Z_L(M; s) \in \mathbb{C}[P^S, P^{-S}]$ が得られますか。一方定義から, $\{\beta_{\Gamma L}(s)\}^{-1} Z_L(M; s) \in \mathbb{Z}[[P^{-S}]]$, (形式的巾級数の環) となっていますから、ただちに定理の主張を得ます。

§2 有限群のゼータ関数

G を有限群, Γ を $\Lambda = \mathbb{Z}G$ を含む $\mathbb{Q}G$ の maximal order とすると、 G の位数を割りきらない素数 p に対して、 $\Lambda_p = \Gamma_p$ となり、Euler product により

$$\zeta_\Lambda(s) = \prod_{p \mid |G|} \zeta_{\Lambda_p}(s) / \zeta_{\Gamma_p}(s) \cdot \zeta_\Gamma(s)$$

を得ますから、 $\zeta_\Lambda(s)$ の計算は $\varphi_p(s) = \zeta_{\Lambda_p}(s) / \zeta_{\Gamma_p}(s)$ の計算に帰着します。また、先の定理の系として、“ $\zeta_{\Lambda_p}(s)$ は全平面で定義された有理形関数に解析接続される” ことがわかりますが、このとき次の関数等式に関する定理が、simple \mathbb{Q}_p -algebra 上で定義された zeta integral の関数等式から導かれます。

定理 (Bushnell-Reiner [1])

$$\zeta_{\Lambda_p}(s) / \zeta_{\Lambda_p}(1-s) = (\Gamma_p : \Lambda_p)^{1-2s} \cdot \zeta_{\Gamma_p}(s) / \zeta_{\Gamma_p}(1-s) \quad -.$$

定理から、 $\varphi_p(s) = (\Gamma_p : \Lambda_p)^{1-2s} \cdot \varphi_p(1-s)$ が導かれ、これより、 $\varphi_p(s) = \sum_{i=0}^n a_i P^i$, $(\Gamma_p : \Lambda_p) = P^m$ とおくと、 $n = 2m$, $a_{2m-i} = a_i \cdot P^{m-i}$, $i = 0, \dots, m$ となり、 $\varphi_p(s)$ に関する情報を与えています。実際に $\varphi_p(s)$ が計算された例としては、 G が位数 P, P^2 (P は素数) の巡回群、位数 $2P$ (P は奇素数) の二面体群と、広中 [1] で示された metacyclic group の場合があり、以下最初の 2 つの例を紹介します。

(I) 位数が p, p^2 (p は素数) の巡回群のゼータ関数

ここで述べた内容は Reiner [1] にあります。以下 p の添字で局所化(完備化ではなく)を示します。さて、

$$G = \langle \sigma | \sigma^{p^n} = 1 \rangle, H = \langle \tau | \tau^{p^{n-1}} = 1 \rangle \text{ とおくと, ます。}$$

$\mathbb{Q}G \cong \mathbb{Q} \oplus \mathbb{Q}(w_1) \oplus \cdots \oplus \mathbb{Q}(w_n)$, w_i は 1 の原始 p -乗根であり, maximal \mathbb{Z} -order は, $\mathbb{Z} \oplus \mathbb{Z}[w_1] \oplus \cdots \oplus \mathbb{Z}[w_n]$ に同型であることがわかります。また, $\mathbb{Z}_p G$ の full ideal を調べるために, 次の自然な fibre product を考えます。

$$\Gamma = \mathbb{Z}_p G \longrightarrow S = \mathbb{Z}_p[w_n]$$

$$\downarrow \qquad \qquad \qquad \downarrow g_1$$

$$\Lambda = \mathbb{Z}_p H \xrightarrow{g_2} \mathbb{Z} H, \bar{\mathbb{Z}} = \mathbb{Z}/p\mathbb{Z}$$

これより, $\Gamma = \{(x, y) \in \mathbb{Z} \times \Lambda \mid g_1(x) = g_2(y)\}$ と表わされます。いま I を Γ の full ideal として, I に対して Λ の full ideal J を, $J = \{y \in \Lambda \mid (0, py) \in I\}$ と定義します。このとき, 或る $g_1((1-w_n)^r) = g_2(y)$ を満たす $r \geq 0$, $y \in J$ があり, $I = \Gamma((1-w_n)^r, y) + (0, PJ)$ と表わされます。逆にこのような J, y, r に対して, Γ の full ideal $I = \Gamma((1-w_n)^r, y) + (0, PJ)$ が定義されます。この対応により, Γ の full ideal I は次のデータで完全に決定されます。

$$I = \Gamma((1-w_n)^r, y) + (0, P\Lambda)$$

(i) Δ は Λ の full ideal

(ii) r は $g_1((1-w_n)^r) \in g_2(\Delta)$ であるような正整数

(iii) $y \in \Delta$ は $g_2(y) = g_1((1-w)^r)$ である mod $P\Lambda$ の代表

特に, $\Gamma = \Gamma(1, 1) + (0, P\Lambda)$ より, 上の I について,

$$(\Gamma : I) = P^r (\Lambda : \Delta)$$

となります。また、 N_Δ を Δ, r が与えられたときの

y の取り方の数とすると, k_Δ を $g_2(\Delta) = (1-\tau)^{k_\Delta} \not\equiv H \pmod{P}$ で定義するとき,

$$\begin{aligned} N_\Delta &= |\Delta \cap P\Lambda : P\Lambda| = |\Delta : P\Lambda| / |\Delta + P\Lambda : P\Lambda| = P^{p^{n-1}} / P^{p^{n-1} - k_\Delta} \\ &= P^{k_\Delta} \end{aligned}$$

これより

$$\zeta_\Gamma(s) = \sum_j P^{k_j} \sum_{r \geq k_j} \{P^r (\Lambda : \Delta)\}^{-s}$$

さて、この“公式”に $n=1, 2$ の場合で計算をやっています。 $n=1$ のときは、 $\Lambda = \mathbb{Z}_p$ で Δ は、 $\Delta = P^t \mathbb{Z}_p$, $t \geq 0$ と表され、 $t=0 \Rightarrow k_\Delta = 0$, $t \geq 1 \Rightarrow k_\Delta = 1$ だから

$$\begin{aligned} \zeta_\Gamma(s) &= \sum_{n \geq 0} P^{-ns} + P \sum_{t \geq 1} \sum_{n \geq 1} P^{-(n+t)s} \\ &= (1 - P^{-s} + P^{1-2s}) \zeta_{\mathbb{Z}_p \oplus \mathbb{Z}_p w_0}(s) \end{aligned}$$

$$\zeta_{\mathbb{Z}_p^2}(s) = (1 - P^{-s} + P^{1-2s}) \cdot \zeta_{\mathbb{Z}}(s) \cdot \zeta_{\mathbb{Z} w_0}(s)$$

が得られます。なお $n=1$ の場合は Solomon[1],

Bushnell-Reiner[1] でも計算されています。

$n=2$ のとき Γ の full ideal I は

$$I = \Gamma((1-w_1)^m, z) + (0, Pz), \quad z \in J$$

$$J = \Lambda((1-w_1)^r, y) + (0, P^{t+1}z_p), \quad r \geq k_{P^t} z_p$$

$$\begin{cases} t=0, r=0 \Rightarrow y=1, t=0, r \geq 1 \Rightarrow y=0 \\ t \geq 1 \Rightarrow y=0, P^t, \dots, (P-1)P^t \end{cases}$$

として得られ、 $(\Gamma : I) = P^{r+m+t}$ から $I =$

$$t=0 \Rightarrow k_J = \min(r, P-1)$$

$$t=1 \Rightarrow r < P-1 \text{ で } k_J = r$$

$r \geq P-1$ で $P-1$ 個の y に \rightarrow して

$k_J = P-1$, 1 個の y に \rightarrow して

$$k_J = P$$

$$t \geq 2 \Rightarrow k_J = \min(r, P)$$

となります。以下計算を示すと、

$$\begin{aligned} J_I(S) &= \sum_{r=0}^{P-1} \sum_{m \geq r} P^r \cdot P^{-(r+m)s} + \sum_{r=P}^{\infty} \sum_{m \geq P-1} P^{r-1} P^{-(m+r)s} \\ &\quad + P \cdot \sum_{r=1}^{P-2} \sum_{m \geq r} P^r P^{-(m+r+1)s} + (P-1) \sum_{r \geq P-1} \sum_{m \geq P-1} P^{r-1} P^{-(m+r+us)} \\ &\quad + \sum_{r \geq P-1} \sum_{m \geq P} P^r P^{-(m+r+1)s} \\ &\quad + P \sum_{r=1}^P \sum_{t \geq 2} \sum_{m \geq r} P^r P^{-(m+r+t)s} \\ &\quad + P \sum_{r \geq P+1} \sum_{t \geq 2} \sum_{m \geq P} P^r P^{-(m+r+t)s} \\ &= \dots \end{aligned}$$

となるわけですが、結果は非常に複雑なものになります。

(II) $G = \langle \sigma, \tau \mid \sigma^2 = \tau^p = 1, \sigma\tau\sigma = \tau^{-1} \rangle$, p は奇素数
のゼータ関数

ニニでは, Bushnell-Reiner [2] の紹介をします。

$\omega: 1$ の原始 p -乗根

$$L := \mathbb{Q}(\omega), K := \mathbb{Q}(\omega + \omega^{-1})$$

$$S := \mathbb{Z}[\omega], R := \mathbb{Z}[\omega + \omega^{-1}]$$

$H := \langle \rho \mid \rho^2 = 1 \rangle$ … 位数 2 の巡回群

$S \circ H$: twisted group ring

… R -order in K -algebra $L \circ H \cong M_2(K)$.

まず, $\mathbb{Q}G \cong \mathbb{Q} \oplus \mathbb{Q} \oplus M_2(K)$ で, $\mathbb{Z}G$ を含む maximal order は $\mathbb{Z} \oplus \mathbb{Z} \oplus M_2(R)$ と同型です。さらに, fibre product, $\mathbb{Z}G \longrightarrow S \circ H$ を考えます。

$$\begin{array}{ccc} & \downarrow & \downarrow \\ (\ast) \cdots & \downarrow & \downarrow \\ \mathbb{Z}H & \longrightarrow & \mathbb{Z}H \end{array}$$

- $\Psi_2(S)$ の計算 -

(*) を 2 で局所化すると, $\mathbb{Z}_2 G \cong \mathbb{Z}H \oplus S \circ H$ を得ます。

(= かけ $p \neq 2$ は F_3) ニニ, $S \circ H$ が $L \circ H$ の maximal R_2 -order である (Auslander-Goldman の仕事によると) ことに注意すると, (I) の結果より,

$$\Psi_2(S) = S_{\mathbb{Z}H}(S) / S_{\mathbb{Z}H}(S) \cdot S_{\mathbb{Z}H}(S) = 1 - 2^{-\varepsilon} + 2^{1-2\varepsilon}$$

を得ます。

- $\Psi_p(S)$ の計算 -(x) を P で局所化して,

$$\text{fibre product} \quad \Gamma = \mathbb{Z}_p G \xrightarrow{f_1} \mathbb{Z}_p H = \mathbb{Z}_p e_1 \oplus \mathbb{Z}_p e_2$$

$$f_2 \downarrow \qquad \qquad \qquad \downarrow g_1 \quad e_1 = \frac{1-p}{2}, e_2 = \frac{1+p}{2}$$

$$\Lambda = S_p H \xrightarrow{g_2} \bar{\mathbb{Z}} H$$

を考えます。ここで、 Λ は $L \circ H$ の hereditary order (Auslander-Rim の仕事による。) ですから、 π を R_p の prime element (S_p, R_p は d.v.r.) とする π 、 $|R_p : \pi R_p| = p$ で、 $\Lambda \cong \left\{ \begin{pmatrix} a & \pi b \\ c & d \end{pmatrix} \mid a, b, c, d \in R_p \right\} = T \subset M_2(K)$ となります。

$\Lambda = \{(x, y) \in \mathbb{Z}_p H \times \Lambda \mid g_1(x) = g_2(y)\}$ と表わし、 $\mathbb{Z}_p H$ の full ideal が、 $\mathbb{Z}_p H x$ 、 $x = p^k e_1 + p^\ell e_2$ ($k, \ell \geq 0$) で全て得られます。よって、 $\ker g_2 = (1-w)\Lambda$ に注意する π 、(I) と同様に Γ の full ideal は $\mathbb{Z}_p H$ と Λ の情報から次のように決定されます。

$$I = \Gamma(a, b) + (0, (1-w)\Lambda)$$

i) Λ は I の full ideal

$$(i) \quad g_1(a) \in g_2(\Lambda) \text{ となる } a = p^k e_1 + p^\ell e_2$$

$$(ii) \quad b \in \Lambda \text{ は } g_2(b) = g_1(a) \text{ である mod } \Lambda$$

さらに、 $(\Gamma : I) = p^{k+\ell} \cdot (\Lambda : \Lambda)$ で、与えられた Λ, a

に対する b の取り方の数 N_I は、

$$N_I = |J \cap (1-w)\Lambda : (1-w)\Lambda| = p^2 / |J + (1-w)\Lambda : (1-w)\Lambda|.$$

こより Λ を T と同一視して考えます。与えられた T の元に対応する Λ の元の g_2 による像は、行列の対角成分を $\text{mod } \pi R_p$ で書いた $\bar{\pi}$ の元を、 $\bar{\pi}H$ の $\bar{\pi}$ -basis. e_1, e_2 の係数として得られた $\bar{\pi}H$ の元に一致します。

さて、 T の full ideal の同型数の代表は

$$T, \pi M_2(R_p), K = \left\{ \begin{pmatrix} \pi^a & \pi^b \\ c & d \end{pmatrix} \mid a, b, c, d \in R_p \right\}$$

となっていることから、 T の full ideal は次の 3 type で完全に決まります。

$$(i) J = Tx, X \in T^X \setminus T \cap GL_2(K)$$

$$(ii) J = M_2(R_p)X, X \in GL_2(R_p) \setminus \left\{ \begin{pmatrix} a & \pi b \\ c & \pi d \end{pmatrix} \mid a, b, c, d \in R_p \right\} \cap GL_2(K).$$

$$(iii) J = KX, X \in GL_2(R_p) \setminus M_2(R_p) \cap GL_2(K)$$

さらに、各々の type で、下に示す表のように、代表 X の取り方が決ります。同時に $g_1(a) \in g_2(J)$ となる a も決まり、 $(1-\omega)\Lambda = \text{rad } \Lambda$ ですから与えられた J に対する N_J も決定されます。 $(\cup \text{ where } R_p \text{ の元の ex. val.})$ を表します。) 表をもとに $\varphi_p(S)$ を計算します。

J	X	$ T:J $	N_J	a
Tx	$\begin{pmatrix} 0 & \pi^n \\ \pi^m & d \end{pmatrix} \quad m \geq 0, n \geq 1, d \in R_p / \pi^n$	$P^{2(m+n)}$	$P \text{ if } \nu(d) = 0$ $P^2 \text{ if } \nu(d) > 0$	$k \geq 1, l \geq 0$ $k, l \geq 1$
Tx	$\begin{pmatrix} \pi^m & \pi b \\ 0 & \pi^n \end{pmatrix} \quad m \geq 0, n \geq 0, b \in R_p / \pi^n$	$P^{2(m+n)}$	$1 \text{ if } m = n = 0$ $P \text{ if } \begin{cases} m = 0, n > 0 \\ n = 0, m > 0 \end{cases}$ $P^2 \text{ if } m, n > 0$	$k, l \geq 0$ $k \geq 0, l \geq 1$ $k \geq 1, l \geq 0$ $k, l \geq 1$
$M_2(R_p)X$	$\begin{pmatrix} \pi^m & \pi b \\ 0 & \pi^n \end{pmatrix} \quad m \geq 0, n \geq 1, b \in R_p / \pi^{n-1}$	$P^{2(n+m)-1}$	$P \text{ if } m = 0$ $P^2 \text{ if } m > 0$	$k \geq 0, l \geq 1$ $k, l \geq 1$
KX	$\begin{pmatrix} \pi^m & b \\ 0 & \pi^n \end{pmatrix} \quad m \geq 0, n \geq 0, b \in R_p / \pi^n$	$P^{2(m+n)+1}$	$P \text{ if } n = 0 \text{ or } \nu(b) = 0$ $P^2 \text{ if } n, \nu(b) > 0$	$k \geq 1, l \geq 0$ $k, l \geq 1$

定理 (Bushnell-Reiner [2])

$$\zeta_{\text{zG}}(s) = \varphi_z(s) \cdot \varphi_p(s) \cdot \zeta_z(s) \cdot \zeta_{\bar{z}}(s) \cdot \zeta_R(2s) \cdot \zeta_R(2s-1)$$

$$\varphi_z(s) = 1 - 2^{-s} + 2^{1-2s}$$

$$\varphi_p(s) = 1 + (p-1)p^{-2s} + 2 \cdot p^{2-3s} + (p-1)p^{1-4s} + p^{3-6s} - \dots$$

文 献

Bushnell-Reiner [1] Zeta functions of arithmetic orders

and Solomon's conjecture. Math. Z. 173, 135-161 (1980)

Bushnell-Reiner [2] Zeta functions of hereditary orders

and integral group rings. Vis. Scholar's Lec.-1980. hal4. (1981)

広中 [1] Zeta functions of integral group rings of meta-

cyclic groups. TSUKUBA J. Math. Vol.5, No.2 267-283 (1981)

Reiner [1] Zeta functions of integral representations.

Comm. algebra 8 (10), 911-925 (1980)

Solomon [1] Zeta functions and integral representation

theory. Advance in Math 26, 306-326 (1977)